

陳述書

2017年12月1日

佐賀地方裁判所御中

住所 福岡県福岡市

氏名 野口 春夫

(1)

私は大分県津久見市で牧師をしている野口春夫と申します。津久見市と福岡市を行ったり来たりする生活をしています。今日はこの機会をお与え下さった事に感謝致します。

私は1941年日本が無謀なアメリカ合衆国との戦争を始めた年に、日本が侵略して作った国旧満州、現在の中国東北部の大連で生まれました。4歳の時、日本の敗戦を迎えるのですが、日本に引き揚げるまでに外地での人間同士の見苦しい争い、女性を守るために女性たちを男装させる苦勞、私を買いに来た（「預けなさい」と言う）中国人を追い返すまでの母親の苦勞、日本に帰る順番を早くするため他人を騙すこと、等々を成長して母から聞きました。今でも思い出すのは大陸からの引き揚船上で亡くなった人のことです。本土を見ないで亡くなった方は、布切れに包まれて板の上を滑らされ、海に落とされ、魚の餌食となり終わりという、人間の尊厳は何も無い儀式を見たことです。

(2)

引き揚げて来て福岡市に住みました。1982年に九州電力が福岡市内に「九州エネルギー館」を造りました。ここには、市内外の多くの学校の生徒や一般の社会人が見学に来ていました。館内では模型でしたが、本物と同じ大きさの玄海原子力発電所原子炉の発電機能が見せられたものです。「これからの発電エネルギーは、石炭でも石油でもなくコストが安い原子力である」という「原子力信仰」が見学者に刷り込まれました。当時は原子力発電が一步間違えば、広島・長崎に落とされた原爆と同じで、大変危険なものだとはつゆ程も知りませんでした。それどころか未来の電力はこれだと思い込まされました。

大学を卒業し、佐賀県と福岡県の県立高校に奉職しました。福岡で最初に勤めたのが現在の糸島市にある農業高校でした。学校の前の国道202号線を「放射能のマーク」を付けた車、その前後には厳重に守る警備の車列が定期的に通っていました。それは勿論玄海原発にウラン燃料その他を運ぶ危険なものでしたが、いつからか船で運ぶようになり、見られなくなりました。この高校は当時、佐賀県の高校の学区も特別に引き受けており、玄海原発から20キロ付近の佐賀県浜玉町（今の唐津市）のミカン農家の子弟も県境を超えて通学していました。

二番目に勤めた高校は工業高校でした。この高校の電気科・工業化学科では、卒業して九州電力や電源開発に入ることが大きな目標の一つであり、生徒たちは就職試験の受験先推薦を受けるため勉学を競ったものです。ですから電力会社に就職が決まると他の科の職員も喜んだものです。電気科ではカリキュラムに工場見学があり、生徒は3年間の内一度は玄海原発を見学に行きました。工業高校に通った生徒たちは、小学校か中学校で「エネルギー館」を見学し、工業高校の電気科等に入ると今度は模型でなく、本物の原子力発電所を案内され、「夢のエネルギー」という「原子力信仰」を二重に「教え込まれた」のです。

定年退職後、私は神学部に入り直し牧師になりました。そして今住んでいる津久見市にある教会の牧師になって15年になります。津久見は「セメントの町」です。セメントの原料がとれる所は地盤が固いので、かつて原子力発電所の候補地に挙げられましたが、住民の建設反対運動もあり、建ちませんでした。

(3)

2011年3月11日、「東日本大震災」が起こったあの日、ここ佐賀地方裁判所では「プルサーマル裁判」の第二回口頭弁論が開かれており、私も傍聴に駆けつけていました。入廷直前に、東日本で大地震

が発生したとの速報が入りました。地震と津波に襲われた原子力発電所も大事故になるかもしれないと、みな口々に心配していました。そして、東京電力福島第一原発では、専門家も指摘していた甚大な大事故へと発展してしまいました。今も避難して故郷に帰れない人が10万人近くもいるのです。

ところでセメントを生産するには、石灰石だけではなく、必ずその他の原材料も混ぜなければなりません。大震災の後、震災で発生したガレキを津久見に持って来てセメントの原料に使おうという動きがありました。しかし、放射能汚染を心配した子育て中のお母さん方が中心になり、署名を集めたり、新聞にチラシを入れたり、「ガレキ受け入れ反対」の運動が起こりました。大分県主催の「説明会」でも、放射能による健康被害を心配して、受け入れ反対の声が続出しました。私が「放射能被害が出たら責任を持てるのか」と質問すると、説明者の一人は「放射能は身体に入っても、トイレで排泄するから、大丈夫」などと回答しました。本当に驚きました。結局、大分県は「ガレキの津久見への受け入れ」を諦めざるを得ませんでした。

今は、福島の石炭火力発電所で使ったオーストラリア産の石炭の燃えカスをセメント材料としてセメント会社は使っているようですが、市民団体では常時「放射能」の測定を行って監視しています。

この放射能こそが問題なのです。

(4)

かつて大分県では、四国電力の伊方原子力発電所が事故を起こせばそこから放射能が海上を直線距離でやってくるというので、伊方原発設置反対運動が繰り広げられてきました。そして今、東京電力福島原発事故、及び事故処理の様子を見て、これではいけないと「伊方原発の廃炉を求める裁判」も起きています。

津久見市には玄海原発の事故の時には山越えて放射能が、伊方原発からは海上を60キロ真っ直ぐに放射能等がやってきます。両方が同時に事故を起こすと、放射能が「ステレオ」でやってくるのです。リアス式海岸と山に囲まれ、マグロやミカンなど海の幸、山の幸の豊かなこの津久見の町に住めなくなってしまうのではないかと、私たちは戦々恐々としているのです。

(5)

私には辛い出来事があります。あこがれの九州電力に就職した教え子が卒業して数年で自ら命を絶ってしまったのです。理由は分かりませんが、この教え子の死は忘れることはできません。

そして、私には心配なことがあります。もしも、玄海原発が事故を起こしたら、佐賀や福岡の教え子たち、それに元同僚の教師たちを含む多大な人々が一番に放射能の被害を受けるかもしれないと。勿論私自身は「ステレオ」で原発事故による放射能の被害を受ける危険の中にあるということから解放してもらいたい願いがあります。

原子力発電所の広報宣伝を行い、「原子力信仰」を植え付けていた「九州エネルギー館」も東京電力福島原発事故を機に、2014年3月、約700万人の方々に「原子力信仰」を宣教して閉館になりました。今はマンションの用地になっているようです。

敗戦の引き揚げの混乱の中で、人間の醜い争いを見て来て育った者として、原発事故後の混乱等が重なって見える時、その様な心配が無いところに日本を変えて貰いたい、そのためにエネルギー館と同じように原子力発電所が静かに消えていただくことが一宗教者の願いであります。